

I-C-4

妊婦の便秘症に対する乙字湯（EK-3）の臨床効果の検討

賛育会病院産婦人科、帝京大学医学部産婦人科*

○為近慎司*、合阪幸三、國保健太郎、齊藤英樹、笹森幸文、都築浩雄、鳥谷葉子、
吉田浩介、森 宏之*

【目的】 乙字湯（EK-3）は、柴胡、当帰、甘草、升麻などが配合された漢方製剤で、痔疾、便秘に有効であるとされている。一方、妊婦は便秘がちで、骨盤血流量が増加していることもあり、痔疾を合併しやすいことはよく知られている。そこで、妊婦の便秘症に対する乙字湯の有用性を、多数例について検討した。 【方法】 1993年1月より1年間、賛育会病院を受診した妊婦（15週～35週）で、便秘を主訴とし、漢方薬内服可能な54例に対し、乙字湯（EK-3、カネボウ薬品）を投与し、その効果を検討した。投与量は、当初1日2gより開始し、効果の認められなかった症例に対しては漸次増量して、最終的には1日6gまでとした。投与期間については、特に制限を設けなかった。評価の指標として、1週間の排便回数、便の状態、腹部膨満感の有無について調査した。分娩の終了した症例については、その状況、新生児に対する影響についても検討を加えた。研究期間中は他の緩下剤を併用しないよう配慮した。 【成績】 1日投与量は、 3.7 ± 1.7 gで、軽症例（週に2回以上の排便を認めた症例：41例）では1日2g内服例が多くみられ（26例、63.4%）、重症例（週に2回未満の排便を認めた症例：13例）では1日6g内服例が多かった（9例、69.2%）。適量の乙字湯の投与により、1週間あたりの排便回数は、 2.4 ± 1.7 から 7.1 ± 0.4 と、有意に増加した（ $p < 0.01$ ）。便の状態は、乙字湯投与前は全例硬便であったが、投与開始4週後には普通便42例、軟便12例と著名に改善された。腹部膨満感も投与前は全例中等度以上に認められたが、乙字湯の内服により6週目には消失した。しかし、重症例では、投与量が多くなったことから、患者自身の希望により、13例中10例は6週以後他の便秘薬に移行した。また、分娩時の特殊な合併症は認められず、新生児の異常もなかった。分娩後の痔疾（主として脱肛）の発生に関しては、54例中42例（77.8%）にみられ、全体の発生頻度（80.4%）と差はなかった。今回の検討では、投与量を症状に応じて適宜調節したため、水様便などの副作用は1例も認められなかった。

【結論】 妊婦の便秘症に対して、乙字湯の投与は極めて有用であることが明らかとなった。